
非現実

天海雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非現実

【Nコード】

N4389M

【作者名】

天海雨月

【あらすじ】

世の中には主人公などいない。それぞれの視点で話は進んでいく。

目次

第一回『実験動物編』

第二回『暗殺部隊編』

第三回『もめごと処理屋編』

第四回『都市破壊計画編』

第五回『何でも屋編』

- 第六回『地球征服編』
- 第七回『異常な事態編』
- 第八回『暗殺部隊再来編』
- 第九回『未来から着た編』
- 第十回『神の一手編』
- 第十一回『革命編』
- 第十二回『マスターハンター編』
- 第十三回『過去との決別』

プロローグ（前書き）

映画 *Wanted* 見てたら、この能力最高じゃねっと思ひまして、小説にしました。

ブローグ

ブローグ

「ぐは、こいつ何なんだよ」

鉄棒や金属バットを持った暴走族が一人の男になぎ倒された。普通狙われた相手は袋叩きにされてもおかしくなかった。ところが、たった一人の男みたいな奴に全員吹っ飛ばされて、倒されていく。

「総長、こいつ人間なんですかね」

「無駄口叩くな。あいつを殺せ、殺せ」

総長の言葉も空しく、暴走族は大半吹っ飛ばされて意識を失っていた。その男みたいな奴は最後に残った総長に歩みよった。全く返り血を浴びずに前へと進んで行く。

「お前何だよ。お前人間かよ」

すると総長の前に立った男みたいな奴はプラカードを出して、返事をした。

「人間だよ（笑）」

総長の叫びも空しく、彼は殴られて意識を失った。暴走族があればど脅えて、異常になったのは、彼らを襲ったのは生身の人間ではなかった。正確にいうとトラの着ぐるみを来た人だったからだ。彼は総長が気を失っているのを知らずにもう一度プラカードを出して、総長にメッセージを放った。

「お前ら今何時だと思ってるんだ??（怒り）」

関東最強極悪組が一人の男みたいな奴に全員皆殺しにされた。明らかにその男だとわかったのは女性にしてはがっちりとした体を持ち、ヤクザたちに汚い男言葉を吐いていたのである。

「てめえ、こんなことをしてこの世で生きていけると思っているのか」

「お前からこそ、ここがどこか知ってるのか、東京じゃないぞ、九州

だぞ」

「組長をお助けしろ、お前ら」

そんな命令も空しく、組長の頭を吹っ飛ばし、殺してしまった。部下たちは悲鳴を挙げた。目の前に死が迫っていることに脅えてしまったのだ。男は黒いスーツを着て、黒い色のネクタイを締め、黒色の靴を履いていた。一見喪に服しているようだったが、違ったのは両手に刀を持ち、顔は白い仮面で覆いかぶされていた。顔も分らない、そして誰の指図なのかも不明な状態である。

「お前、何の為に俺たちを殺したんだ」

最後に残ったヤクザは仮面の男に話しかけた。しかし、話しかけても無駄だったようで、彼はすぐさま散った。男は全員死んだ事を確認しながら、独り言を言った。

「ただの暇つぶしだよ」

日本から遠くに離れた場所でも現実すぎるものが起きていた。最も日常的な場所ではなく、争いが常に発生し、死体なんて当たり前な戦場のことではある。

「軍曹、こちらの戦況は絶望的です。応援を要請しましょう」

「貴様、本体と連絡できないのにどうやって回線をつなぐ」

「しかし、このままでは・・・」

適地から爆音が聞こえてきた。さっきまで敵側の歓声が恐怖の声へと変わっていったのがなんとなく分かる。彼らは彼ら独自の言語でわけのわからないように早口で話しているようだった。最初は百万といった兵士の声がだんだんと少なくなっていたのを感じ取った。

軍曹はちよつと防空壕みたいなものから頭を出した。一人の男が敵国の兵士に銃を向けている。敵国の兵士は嘆願しているかのように何やら言葉言っていたが、その男は聞こえないかのように敵国の兵士に無慈悲にも銃を撃って殺した。

「貴様、あいつが誰なのか知っているか」

「軍曹、わたしにはわかりません。でも近寄りたくないです。吐き

気がする」

一般兵はその男の目を見ただけで吐いてしまったのだ。

「貴様の気持ちが分かる。なんだこれは、この男狂っているのか」
そして彼らは意識が遠のいた。その男は人を恐怖にさせる目を持ち、傭兵ともいえる武器が多く彼の背中にあつた。腰には刀かサーベルのようなものがあり、今時誰も着ていないような西洋のガンマン風の服だった。男はつぶやいた。

「ここも違うのか」

「警部、準備は万全です。髑髏鬼死刑囚は何を脅えているのでしょうか」

「あいつが自分から出頭するなんて、世の中どうなっちまったんだ」
「そういえば、何かに脅えていましたね」

「ああ、そうだな」

警部は髑髏鬼死刑囚をちらりと見た。名前と同じように鼻は削ぎ落とされ、目の下は隈だらけ、手は骨と皮がくつついているほど痛々しいが、この体で被害者たちは騙されてしまう。絞め技が殺人級なのである。そして、撃ち殺そうとも彼の目を見てしまい、恐怖に捕われ撃てなくなるのである。そんな、最も恐ろしく、死神よりたちが悪いと噂された奴が警部と刑事の前ではおとなしく震えているのだ。時折誰に独り言を言う。

「ハ・・・ハ・・・ハ・・・助けてくれ。俺はこんなところで死にたくないよ、うぐっ、げ」

と何回も独り言を言う。警部は髑髏鬼死刑囚から一瞬だけ目を逸らした。その時、髑髏鬼の頭から血が吹き出した。そして、声を発する間もなく倒れてしまったのだ。警部と刑事は自分の目を何度も擦った。彼らがいたのは尋問室、一体どこから撃たれたのかわからないのだ。窓はあるが、十センチメートルしか開いていない。そんなところから弾が飛んできたともいうのか。しかも狙撃された場所が警視庁である。こんなところ誰も狙わない場所なのに一体誰が、

警察に宣誓布告したとでもいうのか。

「くそ、横水。狙撃犯を見つけ出せ。この警視庁からそう遠くない場所だ」

「はい、警部」

他の刑事たちも怒りを表した。自分たちの場所で犯罪など起こらないと信じた場所で殺人事件が発生したのだ。怒り狂う警視庁から約四キロメートル離れたビル屋上から一人の男が狙撃銃を直していた。その男は黒髪に赤いコート、口からキャスターマイルドのタバコを吹かしていた。男は空を見上げて言った。

「くだらねえ仕事だな」

プロローグ（後書き）

へんな所真似てしまった。

『実験騒動編』（前書き）

実験動物編ではなく、実験騒動編でした。誠に申し訳ありません

『実験騒動編』

第一回『実験騒動編』

俺はいつも通りに頼まれた荷物を宅配していた。宅配便で送ることは簡単だが、送らないといけない側は結構大変である。まず、事前に全てのルートを覚えないと行けない。どこが工事中でどこが封鎖されているのかも知らないといけない。運転免許書はもちろんだが、安全運転を心がけないと世間に文句を言われる。宅配会社は学校のようなものである。学校がPTAを恐れるのと同じで宅配会社も臍履されている会社には文句が言えない。俺もその犠牲になったわけである。会社から突然電話が入ってきて、N・C会社にこの荷物を宅配しろと言われた。N・C会社は基本的にゲームなどを制作する会社で有名だ。

この会社に近づくにつれて体が凍り付く感じがした。自分で言うのも何だが、ゲームが作られているのは一階で後は何に使っているのかわからない、そんなところに行くなんて正気の沙汰じゃない。第一、休日なのに何故こうも人が多いのかわからないからだ。普通休日は警備員ぐらいが警備しているだけだと思っていたが、ここは休日がないのかと思うぐらい騒がしかった。荷物を持ってきたがその荷物はとても軽かった。段ボール箱なのだが、何が入っているのかも記されていない、ただ俺に頼んだ会社の人びどく脅えた感じがした。そんなにこの人は怖いのかと思った。俺はここに二、三回しか行ったことがない。一回目は挨拶の時、二回目はある小さなプラスチックの容器を届けに行ったとき、そして三回目は小さな段ボールを届けに行った時だけだ。先輩たちの間では四回目にこの会社に配達に行く事は不吉で過去に四回以降行った人がいないらしい。俺としてはそんな噂を信じていなかったが、いざ目の前に来ると足が震えて前に進めなかった。俺は自分を落ち着かせながら

ら受付へと足を勧めた。自分自身にいつも通りに受付のお姉さんに判子を貰って終わりだと、言い聞かせた。

「あの、シロクマ藤山の宅急便ですが、お荷物届けに参りました」

「あ、はい」

そうだ、これで終わりだ。そう思った矢先にいつもと違った口調でお姉さんは俺に言った。

「これは科学部用ですね。科学部は十三階にあります。そこで判子を貰って下さい。あと、くれぐれも違う階には足を踏み入れないで下さいね」

お姉さんが何か違う人だと思えるくらい変わっていた。前に会った人とは中身が違うように素っ気無かった。彼女から発する笑顔は俺に対しての敵意とでも表したい。俺は彼女がまるで人の皮を被った化け物のように思えた。俺はたいてい人がどんな感情を持って接しているかは分かるが、彼女はそういった感情が見受けられない。やばい、何考えてんだ俺は。俺はエレベーターに乗り、十三階のボタンを押した。十三階といえば結構上のはずだが、すぐに着いた。そこは真っ白な場所で部屋にいくつもの番号が書いてあった。一つだけ科学部としか書いてなかった部屋があった。科学部の部屋だけ血のついたような感じの跡が残っていた。俺はこの部屋から異様な雰囲気が出てくるのを感じ取った。俺にもシックスセンスがあったのか。いや、ここで判子を貰えば、さっさと帰れる。そう言い聞かせながら、部屋に入り込んだ。

そして、目の前にはへんな生き物が十匹ほどいた。そいつらは口を赤くして何かを食べているようだった。猿とえばいいのかわからないが、俺に狂ったように吠えだしたのだ。しかも襲いかかろうとした。俺は、そのとき咄嗟に部屋から出て、扉を閉めた。そして、扉の前で考え始めた。夢だと信じたかった。ドアを押さえつけたが、猿いや狂った猿たちはドシ、ドシとドアに体当たりしてくる。何度

も何度もドアを潰すかのように。俺はその時、どうすればいいかわからなかった。でも咄嗟に隣の部屋が少しだけ空いていることに気がついた。そして、俺は隣の部屋のドアを開け、扉の外に息を潜めた。すると狂った猿たちは何の疑いもなく、隣の部屋に飛び込んだではないか。そして俺は慌てて扉を閉めた。どうやらここだけは自動ロックで閉めれるようだった。俺は安堵ともに自分が届けるはずの箱が異様に軽い事に気付いた。俺はこんな死にかける体験をしたのだからこの箱の中身を開けさせる権利があると思ったのだ。そして、そこにあつたのは長い文章が書いてある紙切れだった。こんなもののために

俺は命を狙われたのか。そんなことを思いながら、恐る恐る二つ折りしている手紙を読んだ。

《拝啓、この品物を運んでいる青年へ。

君は非常に運が良く、悪い方でもある。

運が良いというのは我が社の第二百回人間改造計画に参加できたというものである。

悪いというのは君は自らの手で私が用意した刺客と戦わなければならないということだ。

もちろん君の幸運を祈るが、私たち会社としては君が負けてくれたほうがいいんだけどね。

私が用意したのは十匹の狂った猿、そう「きょうえん」とでも名付けようか、その猿たちを撃退することだ。

甘さなんて捨てることだね。彼らは人間を食うことを好む動物だということ。

これだけだと思つのは君の勝手、さあゲームの始まりだ。

P.S.

君が死んでも誰も悲しまない。そういう事は調査済みだ。君はここに足を踏み入れた時から運命は決まっていた。あと、殺せなかったら、どこまでも追いかけてくるから、忘れずに《

俺はこんなものを大事そうに持っていたのか。そう考えながら、その場に座り込んだ。

赤いコートを着た男は向かいに一人の男が立っていることに気付いた。その男は手に鉄パイプのような物を持ち、椅子に座っていた男を殺しているようだった。男は髪の毛が青く、長髪でしかもガムをクチャクチャと噛んでいた。赤いコートを着た男は青い男に言った。

「また、撲殺か。好きだなそういうプレイ。それよりもまたガムか。いいかげん諦める、ガム噛んだくらいでタバコは辞められねえぞ」

「やらない奴に説教されても説得力はねえよ」

「何だと、この青二才が」

「あん、今更先輩面かよ」

二人が取っ組み合いになりかけた時、今まで見ていたかのように陰から声がした。

「やめろ、二人とも。それよりも新しい仕事が入りそうだ」

「ちっ」

二人は途端に取っ組み合いをやめた。そして、この男に逆らえないような雰囲気である。陰からだが、その男から来る威圧感は常人ではなかった。

「おい、お前ら。さっさと今の奴をどっかに埋めて、本社に戻るぞ。どうやら新しい実験体が来たようだ」

「またか」

三人はその場を後にした。血まみれの男は新聞でも有名な殺人鬼と似た顔をしていた。

俺が座り込んでいたら、さっきの猿たちが今度は閉まっているドアを怖そうとしていた。恐怖に捕われた俺は、思わず叫んでしまった。理不尽な出来事があると人は誰だって叫びたくなる、それが人間という生物だからだ。俺は空いている部屋が科学部だけだと分かった。あまり信用できなかったが、一応電気を付けて中を見渡した。中は科学部に相応しいほどの物がたくさんあった。ところどころ壊されているのはさっき猿たちを入れたせいだろう。そう思いながらそこに転がっている鉄パイプ拾った。その時、俺に向かってくる動物いた。さっき全部の猿たちがいたわけではないということを見落とした。猿というだけで考えが甘かったのだ。こいつら猿は俺たち人間より遙かに頭がいい、つまりここに忍び込んでいても可笑しくはなかった。この猿は俺がここに入るとわかっていたかのように俺に飛びかかってきた。俺は腕を噛まれ、必死にそいつの頭を鉄パイプで殴り続けた。猿の歯は俺の腕に刺さり込み、血が洪水のように流れ落ち、腕が引き千切られるかと思った。ようやく殴り終えて、猿が死んだのがわかったが、猿の頭から脳のようなものが出てきたときにはさすがに吐いた。罪悪感だと思っていたが少々違う。どちらかというと今まで蓄積された恐怖だろう。これほど吐いたのは久しぶりだ。あと、九匹殺さないといけないのは少々嫌な感じがした。腕は二本しかない、ならば鉄パイプを二本持てば勝てるかどうかは疑問だ。

科学部ということ忘れていた。俺は、さっきまで猿たちが食っていたものを見て、また吐き気がした。人の腕だからだ。そして、その近くに何か紙が落ちていた。その紙を見て、俺は驚いた。さっき貰った紙と同じではないか。違うとすれば第百九十九回ということだけだ。つまり、この会社は人体実験を何事もないように実験しているともいうのか。いや、考えるのは止そう。今起こっていることに集中しなければならぬ。俺の力では一体仕留めるだけ精一杯だ。ならば、まとめて始末するにはどうすればいいか、考える俺は長い時間考えた、その時間が一時間だと思えたが、携帯の時計

を見ると五分ほどだった。ちょうど水があつた、さつき猿たちが暴れたのだらう。そこから大量の水が溢れ出た。この蛇口をいとも簡単に壊せるのだから、相当な腕力だらう。水と電気、そうか感電死させればいいのか。

だが、電気はどこから調達するさすがに蛍光灯から電気なんて来ないだらう。そうしている間に隣の部屋のドアが破られるのに気付いた。このままでは食われてしまう。ならばと思い、俺はドアと俺との間に水を打っ掛けた、ドアは開けっ放しに猿たちを待ち構えた、鉄パイプ二本持って。猿たちは躊躇無く入ってきた。一、二・・・九よし、全員いるな。俺は蛍光灯を壊し、そこから来る電気で感電死させようと思った。ところが、奴ら勝手に自爆した。どうしてかわからなかった。猿たちが叫びだし、演技のようにも見えたが、目から血を出し、お互いを殴り合い、そして最後の一匹になるまで死に絶えてしまったのだ。これほどあつけないものはない。そして、さつき電気を送った水は当然俺にも届いたので半端ないほどの電気が俺を襲った。黒こげにはならなかったが、脳や心臓が揺れて、目が可笑しくなった。感電したところでようやく何が起こったのかわかった。猿たちは摩擦電気に襲われたのである。それに驚き、ノミのように振り払おうとした結果お互いが密集していたのも原因ではあるが、殴り合いに自分たちで自分たちを殺す結果となったのだらう。俺はそこらへんにあつた布で傷口から血を止めた。意外にもあつてなかったと思つた。だが、これで会社側は落胆するだらうこの俺が生き残つたことに。口から笑みが止まらない、とっさに大きな声を出してしまった。

「ふははは、ざまーみる。お前らの計画は破綻だ」

命を得た時ほど嬉しい物はない。そう思い、笑っていたが、床に水でぐしょぐしょになった紙の文字が気にかかった。《これだけだと思つのは君の勝手》という文字だ。まさかまだいるのか、そう思っていたら目の前の扉から低いうなり声が響いた。この声はさつき

とは違う。そう大きな猿か、まさか狂ったゴリラとでもいうのか。そう考えた俺は間違っていないかったことに後悔した。何故ならドアがいきなり吹っ飛んで木っ端みじんになっていて、目の前にゴリラに似ても似つかないほどの存在がいたからだ。

「まだ、奴は見つからないのか」

「新庄警部、落ち着いてください。今他の刑事に連絡しています」

「くそ、二件もだぞ。髑髏鬼と鬼神が殺され、しかも警視庁の中でだ。こんなことを考えているのは変人かテロリストぐらいだよ」

「新庄警部、さきほど髑髏鬼から発見された薬莢が分かりました」

「何口径だ。M21のものか、それともVSSか、あるいはM16か」

「いえ、どれのものかさっぱりわかりません。特徴といったものが無いのです」

「そんな馬鹿な。普通、薬莢で全てとは言いきれんが、銃の種類ぐらいわかるだよ」

「いや、銀色の弾丸だということだけしかわかりませんでした」

「皮肉なことだな。悪霊を倒すために銀色の弾丸を使ったように見せかけたともいうのか。くっ、それよりもあの暗号は解けたか」

「はい、鬼神が書いたと思われる血の遺言はどうやら彼が書いたものではないということが判明しました」

「奴のものではない。じゃあ、誰が書いたんだ」

「それが犯人によるものだと思います」

「ふん、俺たちに挑戦状というわけか。それで、なんて書いてあったんだ」

「いえ、その、この内容をいうのには少々抵抗があるのですが」

「別に俺は怒らんよ」

「はい、では読みます。無能な警察は要らない。さっさと自分たちが作った檻の中で震えている。お前たちでは悪を裁けない、代わり

に俺たちが裁いてやる。世界が滅亡するまで泣き続ける」

新庄警部は机にあった灰皿を床に叩き付けた。そして、拳を何度も机に打ち続けた。

「こいつは本当に狂った頭をもっている人間だな。だからわざわざ警視庁内の檻に鬼神を置いたのにも納得できる」

「しかし、警部。このまま黙っているわけにはいきませんかでしょう」

「確かに。ところで上は何て言ってるんだ。まさか手を引けと言ってるのか」

「実は・・・」

「そうか、警察はいつから腑抜けになったのかな」

「さあ、戦後からではないでしょうか」

「悪いが、こんな挑戦状を叩き付けられて家で寝るよりは事件の解決に挑んだほうがまだましだ。一緒に来るか佐野」

「お供します」

このゴリラは一体何だ。こいつは初めて見る動物だ。こんな動物がまだ世の中にいたとでもいうのか、自分でも信じられない。体や足は確かにゴリラだが、腕はオラウータンのものだし、顔なんて猛々しい顔していて、俺に向けてくるのは悪意でしかないと思う。こんな化け物と俺は戦わなくてはいけないのか。というか、脱出の道は断たれた。こんな二メートルもある馬鹿でかいゴリラが目の前にいて避けて逃げるなんて四十ヤード四秒のアメフト選手でも無理だろう。ゴリラの口からガリツという音とともに何か吐き出した。俺ぐらいの大きさの頭蓋骨である。人間であることは確かで猿の物とは少々違う。こいつの目は俺から逸れない。たしか、ゴリラは目を合わせると襲いかかってくるはずだ。俺は必死に目を背けようとしたが、ゴリラは俺のところへと向かってきた。まるで目を合わせるというような目だった。俺は怖かったので目を合わせないように努力したが、つい目を見てしまった。その途端、俺は宙に舞ってしまっ

た。オラウータンの腕が俺の腹をぶん殴ったのである。肋が六本ぐらい折れる音が聞こえた。

これほど強いというのかと思いつながら、二度目の嘔吐を床にぶちまけた。今度は血だった。ゴリラは第二の攻撃を仕掛けてきた。こいつは野生動物いや、狂ったゴリラだ。どんなことがあるうとも死ぬことは許されない。こんな理不尽なことをされて死んだら、なんかあの科学者に腹が立つ。俺は必死に物を投げた手当たり次第。椅子、ゴミ箱、箒、どれも致命傷にはならないものばかりだ。鉄パイプを投げた瞬間、いけないと思った。鉄パイプは人間でも武器になるもの、こんなゴリラが持てば鬼に金棒だ。案の定ゴリラは鉄パイプを自分の武器とした。振り下ろされて、また怪我をすると思いきや、ゴリラの動きが一瞬止まってしまった。摩擦電気だ。俺はこの瞬間を見逃さなかった。そこらへんにあるものをゴリラの口に入れた。もちろん口目掛けて投げ込んだ。どれとして入ったものはなかったが、たったひとつだけ手榴弾にたへんな小型爆弾を投げて入ったのは見た。だが、こんな小さな爆弾では何にもならないだろう。ゴリラは二、三秒止まってからまた動かし始めた。そのとき、ゴリラの腹の中でバンという音が鳴った。たったそれだけかと思ひ、生きること諦めた瞬間、腹から爆音といえるものが鳴り響き、俺はゴリラの腹から出た臓物などが顔にかかった。一体何が起こったんだ。爆発物にはてんで知識がないからわからないが、あんな小さい手榴弾でゴリラを倒せたとしてもいいのか、さっき投げた弾みでよく見なかった説明書があったのに気付いた。「小型プラスチック手榴弾」と書いてあった。

さすが科学部じゃないものをいるものに作り直してくれるものだな。そして同時に発煙筒のようなものを発見した。そして隣には何故かマツチがあった。これで何をしろというのだ。臓物を払いのけて、三度目の嘔吐で床をぶちまけ、この会社から一刻も早く逃げたかったが、正面には銃のようなものを構えた人がいた。そして、同時に俺に向かって言った。

「よくもやってくれたわね」

「Hold up! You son of a bitch!」

「？」

「I say hold up. You don't understand english? Or perhaps you are a mad guy」

「？」

「Sir, this guy can't understand english. Can I kill him?」

「Wait. Maybe he can speak english but he just act like he can't speak english」

「何を言っているのかさっぱりわからんな。俺の道を邪魔する奴は排除するだけだ」

「What's a...」

二人の兵隊たちは無惨にも首が吹っ飛ばされた。その後ろに若い女の子が体を震えながら、その男に問いただす。

「日・・・本・・・人？」

「そうだ」

さつきとは違い怒った様子もないほど顔から笑みを浮かべた。顔中に傷がなければ良い男であり、イケメンであろうが、傷だらけの顔は殺気を放っているものに近かった。女の子は脅えてしまった。体には無数の拷問跡があり、顔中至るところにあることが肉眼でもはっきりと見えた。

「お前も日本人か」

「う・・・ん、でも・・・の人た・・・ち私を」

「言わなくていいよ、別に。俺も昔は日本人だったから」

「む・・・か・・・し？」

「ああ、思い出したくもない日々だよ。人に受け身だった自分が腹

立つ、まあ、あの後人間改造計画に参加してこの体を得たわけだから、別にどうとは思わないけどな」

「人間・・改造・・計画？」

「はは、なんでもないさ。それよりもお前はそのままここにいいのか、それとも俺についてくるか」

「あたしは・・わからない。このまま、死にたいかも」

「俺はどうするわけでもない。お前が決めた道をただ歩いて行けばいい。死を選ぶならその道を歩いて行け」

「おじ・・さんがいく・・ら殺し・・ても結局は・・一緒だ・・よ」

「かもな。もしかしたら、俺は死にたいからこんなところにいるのかもな。安らかに死にな。俺は殺さない、自分で死にたいと思う奴は殺さない主義だからな」

そう言いながら彼は一人で道をただまっすぐ歩いていった。その背中から寂しさという感情は伝わってこない、ただ憎しみという感情しか伝わってこなかった。

「よくもやってくれたわね」

目の前で女が俺に銃を向けている。何をやったのかはわからんが、このゴリラだろう。

「あたしの研究成果をふいにして、あんたそれでも実験体か」

「逆切れ？」

「は！？どうしてくれんのよ、シヨウジョウが殺されたなんて父になんて言えはいいのよ」

「ふ、ふざけんな。俺は猿たちを倒して安心していたのに、このゴリラがいきなり襲ってきたんだ」

「ゴリラじゃない、シヨウジョウよ。狂った大シヨウジョウよ」

「だいたい自分の口から狂ったなんて言うならあんたをなおさら信用できないね」

「信用してなんて言った覚えはないわよ。いい、シヨウジョウはね、世界初のゴリラとオラウータンのハーフなのよ。あたしの実験がこ

れでパーよ」

「人を襲わなかったら世界初だよ」

「襲うわ。さつき研究室から出てきたのは、研究員が殺されてしまったからよ」

「何気にとんでもないこと言ったな。つまり、誰でも襲うということになるぞ」

「あら、大丈夫よ。あたしにはこいつらがいるもの」

さつきまで部屋に俺とこいつだけしかいなかったのに二人の人間がいた。二人とも黒髪で背が高かったが、一人は赤いコート、もう一人は青いコートを着ていた。赤いコートの奴はタバコをスパスパと吸っている、知らない銘柄だ。もう一人はガムをクチャクチャと噛んでいる。赤いコートといっても気味が悪いほど赤かった、血の色と同じような色だ。青いコートは雲一つない晴天の空の色と同じだった。二人共二十歳後半のように若かったが、赤いコートの男の顔には傷のようなものが見える、誰かに引つ搔かれた傷みたいだった。

「おい、こいつが新人か。こんな奴が本当にボスが期待していたっていうのかよ。シルバーが聞いたら嘆くぞ」

「プルー、あまり変なことを言うな。お前だって最初シルバーに散々駄目だしされていただろう」

「あ、レッド？お前には言われたくないよ、やさ顔でしかも女たらし、最低最悪の人間だってブラックが言っていたじゃねえか」

「てめえ、やんのかコラ」

「積年の恨み今ここで晴らしてやるわ」

二人とも睨み合いを始めた。この隙を突いて、逃げ出すことはできないだろうか。俺は少しずつ後ずさりした。

「おい、おまえは逃げれないぜ」

二人とも睨み合っていて、俺のことなんて見えなかったが、手に目でもあるとでもいうのか。

「はいはい、二人とも喧嘩それぐらいにして、こいつを捕まえて、

父の研究を完成するかもしれないから」

「うーす」

二人ともやる気のない返事だったが、目は真剣だった。俺を獲物に例えるなら、チーターに狙いが定められたシマウマの隣で写真を撮っているカメラマンの後ろで脅えているシマウマである。二人は俺の方へとゆっくりと近づいていった。そろり、そろりと。万事休すか。ふと、手に握りしめていたものに気付いた。発煙筒のようなものだ。マッチもある。神が俺に逃げ道を与えたかのような祝福感だ。まさかこの発煙筒、ダイナマイトじゃないよな。ちょっと赤いけど。ダイナマイト？ 発煙筒？・・・そうか、そう使えばいいんだ。俺はとっさにマッチで火をつけ、発煙筒に火を移した。

「ふははは、てめえらに捕まえられて改造されるなら、ここでお前らと一緒に死んだほうがまだましだ。ダイナマイトであの世に送ってやるよ」

「ダイナマイトだよ。そんなんであの世に行けたらこれまで苦労しねえよ」

「え？」

こいつら驚かないのかよ。ダイナマイトだぞ一応、結構殺傷能力あるほうだと思うのだが。

「おい、坊主いいこと教えてやる。殺傷能力が一番高いのは確かに爆弾だ。だが、その爆弾よりもさらに高いのは銃だ。そして、銃と爆弾に間に位置するのが刀だ。撲殺、銃殺、爆殺、自殺、他殺など色々ある。だがな、俺たちはこの業界で何年も生きている、今更ダイナマイトなんて驚かないのさ。だいたい、ダイナマイトで人を殺せるわけないだろ。人は動くことが出来るのを忘れたか、そんなもん投げて立ったまま呆然とその爆発を喰らうわけがないだろう」

こいつ、今銃とか爆弾とか関係ない自殺と他殺とか言ってたけど、一理あるな。でも逃げないとヤバイ。こいつらは俺が考えているような奴らじゃない。殺し屋と思っていたが、一種の芸術家だな。なと俺は考えながら、発煙筒を床に放した。発煙筒から煙がモクモ

クと出てくる。俺が逃げれるのは二択しかない。一つは強行突破だが、入り口には三人、そして入り口から逃げ出せてもその後が厄介だ。逃げれる自信がない。もう一つは十三階の窓から逃げるという手もある。しかし、その場合死ぬかよくて骨折だ。どうする？俺は慌てながらゆっくりと考えた。この発煙筒はせいぜい三十秒が限界だ。視界を遮っても俺は大丈夫なのか。俺は窓ガラスを叩き割った。ピーン！そうだこの手があった。

「野郎、窓から逃げる気だ」

「何言ってるのよ。ここ十三階よ」

俺は煙を下から眺めながら落ちて行った。人生というものは何か突拍子も無いことが続くこそに利点があつて、何も起きない人生など吐き気がしてならない。あの殺し屋どもに会えたのも運命だったに違いない。その運命から逃げることは少々悲しいな。そう俺は思いながら、俺の背中は何かにぶつかった。

「お聞きください、私は今北九州と下関の間にある関門橋にいます。この関門橋は現在封鎖されています。何故なら、あ、見えました。あの少年が原因で閉められました」

その少年は頭に日の丸の旗を纏い、マイクを持って、後ろに何十人という人々を従え、マスコミに物申ししていた。

「俺は明智光秀みたいな裏切り者かもしれない。俺は現代の信長にたてついた逆賊だ。そう言つて貰つてもかまわない。だけど、俺はあえてこの立場で話したい。今政府が議論している外国参政権について意義を唱える。たしかに長年住んでいた在日韓国人や中国人は日本に帰化しているかもしれない。だけどそれと政治と何が関係あるんだ。人は国のために働くのではない、国が人のために働くんだ。政府が人によつて選ばれたのなら自信を持つて政策に取り組みばいいじゃないか。何故そこまで反日にこだわる。どうして外国の反応を見ようとする。俺たちは外国の空気を読まないと成り立たない存在なのか。違うだろ。俺たちは俺たちの力で日本という国を作り、

俺たち、日本人が日本を作るのが当たり前だ。もし、外国政参政権に文句があるなら、韓国や中国で俺たちに投票権利をくれ、そして韓国や中国に住む日本人に立候補する術を与えて欲しい。それならば俺は認める」

後ろで歓声が響き渡った。マスコミの女の人は騒然として立ち尽くしていた。

「何が表現の自由だ。結局は政府に管理されてるじゃないか。俺たち国民にも我慢の限界がある。我慢の限界を超えると憎しみと怒りの感情に支配されてしまう。捕鯨問題で海犬の攻撃は我々日本人を舐め腐っている。奴らはテロリストだ、なら攻撃してもどうというわけでもあるまい。何故俺たちは待たないといけないのか、聞いた。何故こう俺たちは世界の目を気にしながら生きていけないといけないのか。戦争が終わった日本じゃない、あれからどれぐらい時が経ったか。どれほどの人間が墮落し、世界での地位が下に下がったか。だからいまさら投降なんて糞喰らえだ。俺は日本人だ、俺がどう生きようが世界は関係ない、社会も関係ない、自分の好きなように生きる。フランス革命もそうだ、巨大な王族に革命を起こした市民たち、今こそ立ち上がるべきだ。俺を赤猫と言ってくれても構わない、あるいは革命組織新撰組の一味と考えてくれても別に気にしない。でもこれだけは言わせてくれ。俺は別に日本を転覆しようとは思っていない。俺たち、日本人の誇りを取り戻す為に行動しているだけだ」

報道陣は全員黙っていた。その後ろで野次馬たちが黙ってみていた。その内三人の男がいた。その三人の男は普通の格好をしていなかった。普通の格好とは現代人の格好ではないということだ。彼らが着ていたのは浴衣だった。夏でも無かったのに浴衣を着て、懐はちよつとだけ膨らんでいた。一人は童顔で金髪で目は青色だった。外国人らしき顔だったが、小柄だった。二人目はゴリラのような顔でゴリラのような体でゴリラのような体臭がしていた。ゴリラ的な

体臭とはちよつと加齢臭だけどそれよりも汗臭いといった臭さである。そして三人目は黒髪でキザっぽくタバコを吸っていた。もし力メラが撮っていたのなら気付いていただろう彼らの正体を。彼らは指名手配中の革命家組織、新撰組の一員だったからだ。しかし、野次馬たちは気付かないでいる。何故なら何かに集中してしまうと例え隣りに暗殺者がいても気付けなくなっているのだ。しかし、その内何人かの新聞記者は彼らに気付いていた。彼らは三人組を指差してヒソヒソと声を潜めて互いに囁き合った。

「おい、久保。あそこにいる奴ら見ろよ」

「ああ、俺もびっくりしている真田。あの少年に感謝するべきだな、こんなところであいつらに会えるなんて。悪いがこのニュースは内が明日の朝刊で書く」

「ふん、そうはさせるかタコの助。俺たちだって書くさ。もし記事になったらの話だな」

「だな。俺も思う。どうせ編集長は国民を刺激するとか言っ書かせてくれないけどな」

「まあな。だがあいつらがここにいないということはあの少年は革命組織新撰組に入るといのか」

「弱そうだから入らないだろ。おい、やばい気付かれた。あいつらが消えた」

「さっき写真撮っていてラッキーだった」

「俺もだ」

三人の革命組織の一員はその場を後にした。見物と行動を起こすのとは大きく違う。見物はいわゆる偵察の一部で攻撃をするために足を動かせたのだ。童顔の顔の男はゴリラとイケメンに話しかけた。「山南さん、どう思いますか。あの少年、仲間に引き込みますか？」

「まだ、だと思っけどね藤堂君。谷さんだって彼を引き込むのにはまだ早いつて。ね、谷さん」

「ウホ」

「ほら、そうだって」

「しかし、近藤さんと土方さんには何とさえいいんだ」

「ウホゝ？」

「え、だから俺たちが新聞に載ってしまったことを」

「藤堂君、気にしすぎだ。私たちが載る訳がない、彼らは私たちがまだ存在していることを危惧している。私たちが生きることが国民にバレれば、彼らの時代は終わってしまうからね」

「ウホ！」

「だからそんなに気にしすぎなくていいよ。谷さん」

藤堂は黙ったまま、扉を開いた。どこかの建物でもなく壁に模してある扉を開いた。そして、山南をちらりと見た。

（どうして、谷さんの言葉がわかるのだろう。ただ、ウホとしか言っていないのに）

「まさか、飛び降り自殺とはね。想像していなかったわ」

「朱雀がいけないんだ。あいつを強制的に連れてかせようとするからだ。お前はいいけど、俺とレッドは後でブラックに叱られんだから」

「死体をイエローに頼んで処理してもらうか。結局実験は失敗だな。次は誰にするんだ」

「そうね。この男でもいいんじゃない」

「着ぐるみ着てる男か。なんだこれ本当にこんなやつ社長が望んでいる実験体か？とところでどうしたレッド、腹を下したような顔して」

「おい、おかしくないか。俺たちはあいつが飛び降りたのを見ていないのに死んだと考えるのはおかしくないか」

「お前は頭がおかしいのか、あいつはダイナマイトの威力に吹っ飛ばされて窓に辺り、十三階から落ちて死んだ。それが何の問題があるんだ」

「そこがおかしいんだよ。お前はダイナマイト使ったことがあるか」
「俺は撲殺専門だぜ？そんな野蛮な道具使ったこともねえよ」

「ダイナマイトはあんなに煙がでねえ。つまり、あれほど煙がたのは俺たちを攪乱させるために使った、発煙筒だ。この発煙筒は俺たちを騙すために使ったと考えられないか」

「レッド、そんなに真剣に考えんなよ。ほら、イエローが来た。イエローどうだった」

壁から腕が出てきて、足が出てきた、そして最後に顔が出てきた。西洋風の帽子を被り、全身黒ずくめで帽子を深く被り顔がはつきりと見えなかった。少々薄気味悪い声でブルーに言った。

「おい、ブルー坊や。そんな死体どこにもないよ。あんたたち、たぶん一杯食わされたんだよ」

「うそだろ。ここに死体なんてねえよ。イエロー、ちゃんと探したのかよ」

「ブルー坊や、一体誰に物を言ってるんだい。わたしや、イエローじゃぞ」

「そこらへんにしとけ、ブルー。お前がどう転んでもイエローに勝てねえよ。ブルー俺たちはイエローの言う通りに一杯食わされたんだ」

「でもよ、俺たちは入り口を塞いでいた。あいつにとってはそこが唯一の逃げ道なんだぜ、そこ以外から逃げれる道がないのに、どういう意味だ」

「確かに俺たちから逃げるには入り口か窓からしか逃げる道はない。だが、朱雀ここの他にも出口があるか」

「そうね、ゴミ箱があるわ」

「あんなゴミ箱にどう隠れる？小さすぎるだろ」

「私たち科学部の連中は大量のゴミ及び死体を投げ捨てる場所をゴミ箱というの。ほら、その壁に穴があるでしょう。そこからゴミを投げて一階に送るのよ」

「くそ、それじゃあいつはこれを使ったというのか。最初から逃げ道があったんだ」

「いや、それはないだろう。咄嗟に考えだしたものだろう。窮鼠猫

を噛むともいうだろう、弱いものが強いものに勝つということわざがあるだろう。それと同じであいつは俺たちから逃げるために考えを張り巡らし、行動を起こしたというわけさ」

「レッドや。ちよつとことわざが違うのじゃないか、絶体絶命の危機に察し、逃げた。彼は逃げるが勝ちということわざを使って、私たちに勝っただけではないか」

レッドは顔を赤くした。

『実験騒動編』（後書き）

めっちゃ見にくいかもしれませんが、すみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4389m/>

非現実

2010年10月10日20時11分発行